

二〇一八年十月六日(土)、十月二十日(土)二回にわたって「森三郎の作品を読む会」番外編Ⅱとして、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)

『The Soul of the Great Bell』を読む会 を開きました。

二〇一二年十二月の「森三郎の作品を読む会」で森三郎の童話「鐘」(初出『赤い鳥』一九三一年十月号)を読んだ時、少女の「ンラナイ」という名前に対する違和感からこの話の典拠を探したいという思いが募り、折に触れ「鐘」を取り上げてきました。兄の森銑三の「鐘のたましひ」(『帝國国民』一九二〇年四月号)、ラフカディオ・ハーンの『The Soul of the Great Bell』(一八八七年)、フランス領事P・ダルビー・ド・ティエルサンの中国原典再話『KO-NGAI』(一八七七年)、兪葆真の『百孝図説』(一八七一年)「投鐘成金」まで遡ることが出来ました。(本会会誌『かささぎ』第3号「森三郎童話の原典・話材を探る」参照)

次にハーンの原作を読んで銑三・三郎の話と対比しようと、今回の「番外編Ⅱ」が開催されました。

普段英文に不慣れな会員には原文を読むことはなかなか骨の折れることでしたが、講師の鈴木哲さん(桜花学園大学学芸学部英語科非常勤講師)を中心に、英語に堪能な会員の援助を得、昨年の番外編Ⅰ「ローズ・ファイルマン Rose Fylerman」に引き続き、山田さつきさん(日本福祉大学英語教員)、David Dykesさん(四日市大学英语教員)にも参加していただき、ハーンの原文を味わうことができました。

最初のパラグラフの大鐘寺の鐘楼の鐘の一撞きが境内から北京の町の隅々にまで鳴り響いて行く細かい描写は、これから始まる物語の怪異を予感させるものでした。音波で揺れる様を表す動詞の多様さにも驚きました。

鈴木哲さんからは Margaret Hodges 再話・Ed Young 画

『The Voice of the great Bell』(1989)の紹介や、英語で書かれた鐘を鑄る過程についての図解をしていただき、Dykesさんから辞書に「やや古い」と注のある表現について「聖書によく出てくる」と説明していただく、永楽帝の命令がいかに重く、困難なものがよく分かりました。「Ko-Neai」の人物像も森銑三、森三郎再話の少女のイメージよりはやや大人で、父の身を案じる姿をじっくり読むことができました。山田さつきさんから、八雲の長男・小泉一雄の『父「八雲」を憶う』の中に、ハーンが語る鐘の精の話聞いて一同感に打たれて涙ぐんだとあると紹介がありました。私たちがとつてもまさに同じ思いでした。すずり泣くような鐘の音色を、第一書房版・落合訳は原文通り「Hiai」、銑三・三郎の再話では「ヒイイ！」でしたが、恒文社版・平井訳では「くっ」を意味する「鞋！」と漢字表記だったのも印象的でした。原文で読むことで、「父の為に」と炉に身を投じた Ko-Neai に改めて思いを馳せることができました。

講師から

「『The Soul of the Great Bell』を読む会」のきっかけは、神谷磨利子さんの「森三郎童話の原典・話材を探る」(2017)です。兪葆真から Tiersant Hearn、森銑三を経て、森三郎に至る発見に瞠目しました。神谷論文は『赤い鳥事典』(柏書房、2018)「ハーン、ラフカディオ」(風早悟史)に紹介され、「鐘」の原拠は広範な理解を得ています。

『The Soul of the Great Bell』序章は豊穡という言葉が浮かぶほど表現豊かです。同章と最終章が現在形で、五百年前の Ko-Neai のエピソードは過去形で語られていることを確認しました。十人足らずの小ぢんまりした会にお二人のゲストを迎え、英語のみにとどまらず、参加者それぞれ多くの示唆が得られたことをうれしく思います。鈴木 哲

お知らせ

刈谷図書館協会文化講演会

鈴木潤吉氏『赤い鳥』と祖父、鈴木三重吉

十一月十八日(日)午後二時 中央図書館2階視聴覚室